梅堯臣「魯山山行」を読む

はじめに　戸倉英美
梅堯臣の生涯と『梅堯臣集』の版本について　千葉　貴
古い文献から見た魯山について　謝　智芬
「魯山山行」以前の「魯山」に関する詩文について　山崎　藍
唐宋詩における「野情」について　宇都健夫
「魯山山行」の第二聯と第三聯のつながり―〝随処改〟〝迷〟の表現をめぐって　白井澄世
生物学的に見た「魯山山行」の熊　荒木達雄
「魯山山行」における熊の役割―過去の文学作品におけるそのイメージから考える　安西明秀
「熊」「羆」の相互作用　荒木達雄
「熊升樹」の「升」について　大山　潔
「鹿」のイメージ　小山美樹
「魯山山行」にかかる雲―鶏声との関わりから　梶村　永
梅堯臣「魯山山行」：読後の違和感から始まる逐句的考察　千葉　貴

はじめに

戸倉英美

平成十二年度の学部の演習は「宋詩講読」と題して、梅堯臣の詩を読んだ。取り上げたのは「懐悲」「山行冒雨至村家（山を行き雨を冒して村家に至る）」「祭猫（猫を祭る）」「莫登楼（楼に登る莫れ）」の四篇で、それぞれに関連する作品を併せ読み活発な議論が行われた。だが「魯山山行」は、本来授業で読む予定の作品ではなかった。この詩はしばしば宋詩の選集に収録され、梅堯臣の代表作の一つと目されている。また中国の詩人一般と異なり、梅堯臣には自然を詠う詩は多くない。「魯山山行」はその数少ない例の一つでもあった。しかし私はなぜかしらこの詩が好きになれなかった。自然を詠う詩の一つとして代わりに選び出したのが、「山行冒雨至村家」であった。この詩は聴覚・嗅覚・皮膚感覚を駆使して山中の雨を細やかに描き、果てに尋常の感覚を超えた不思議な描写を試みている。とかく理が勝ち、感覚によって新しい世界を体験させてくれることの少ない梅堯臣の詩の中では、珍しいものであると同時に、宋詩の斬新な一面を示す例として取り上げたのである。だが「魯山山行」は有名な詩であるし、自然を描き、「山行」を主題とする点で共通する。ついでにこちらも読んでみようというのが始まりであった。「魯山山行」を担当したのは、「山行冒雨」と同じく学部四年の馬場昭佳であった。馬場の「鑑賞」を紹介する前に、まず「魯山山行」の全文を掲げよう。（朱東潤『梅堯臣集編年校注』〔上海古籍出版社、一九八〇年〕による。）

適與野情愜　千山高復低　　適に野情と愜う　千山　高く復た低く
好峰隨處改　幽徑獨行迷　　好峰　処に随って改まり　幽径　独り行きて迷う
霜落熊升樹　林空鹿飲溪　　霜落ちて　熊は樹に升り　林空しくして　鹿は溪に　飲む
人家在何許　雲外一聲鷄　　人家　何許にか在る　雲外　一声の鶏

この詩に対し馬場は演習の際に提出したレジュメで次のように述べている。「詩の前半は非常に分析的、理知的な

印象を受ける。それは第一、二、三句に明確に現れている。対象から一歩引いたところに立って解説している詩人の声が今にも聞こえてきそうだ。それは詩人の知覚的興奮を十分に伝えてくれる。しかしながら第四句からは少し感じが変わってくる。詩人の説明という点では対をなす第三句と同じなのだが、〝幽径〟に入り込むことで、それまでの専ら理知的、認識的にかぎられた情報から、身体感覚による実感へと重点が移る可能性を秘めているといえよう。そして第五、六句を経て詩人の不安を表現した第七句、それに安堵感を与える第八句へ続く。第八句は第七句を踏まえているものの、聴覚だけで気持ちを和らげる巧妙な句である。

問題となるのは第五、六句の対である。結論を先に述べると、この箇所は効果を上げていないどころか、詩を悪くしている感さえ否めない。詩人としては山の中の〝幽〟を描写したかったのであろう。しかしあまりに概念的すぎて、またありふれていてリアリティーを著しく欠く。（中略）もしかしたら第五句の「熊」の行動は詩人の独創であり、特殊であるのかもしれない。しかし第六句と対になっている以上、この「熊」も静謐な山林に棲むというイメージのみが前面に出てしまい、実感が伝わってこない。したがってこの対は「熊」「鹿」の概念をそのまま述べたに過ぎない。

だからといって第五、六句は前半四句のように分析的、理知的でもなく、単なる客観的情報に過ぎない。結局のところ詩全体の中で浮いているのだ。私個人の意見としては、第四句で感覚を想起させる句を配置している上に、第七、八句が強く感覚に依拠しているのだから、第五、六句を「山行冒雨至村家」の句のような感覚に密着したものにするべきであると思う。そうすれば前半四句の理知性と後半四句の実感性という均衡が取れ、味わい深いものになるのではなかろうか。」

この馬場の見解をめぐって議論が百出した。前半四句に関してはさほど異論はなかったが、第七句に詩人の不安が表現されているとする見方には、反論が出された。とりわけ大きな問題となったのは、「熊」「鹿」の対であった。中にはこれを、詩全体と調和した優れた自然描写とし、真っ向から馬場と対立する意見もあった。だが大部分はこの対

（特に熊の句）によって、作者が何を表現しようとしているのか掴みきれず、とはいえ直ちに馬場の結論に与することはためらわれるという論調であった。結局作者と同じ時代の読者にとって、この熊はどの程度リアリティーを持ち、どの程度特殊なものだったか、それを知るには中国の古典詩文で、熊がどのように扱われてきたかを知らねばならないという声が上がり、馬場が調査・報告した。学部三年千葉貴は、梅堯臣の詩の中から「坐熊臨碧水（坐する熊は碧水に臨む）」という句を持つ詩「和寿州宋待制九題　狎鴎亭（寿州の宋待制に和す　九題　狎鴎亭）」を発見し、この詩を紹介した。また「魯山山行」の前半は欧陽脩の「遠山」に類似し、最後の二句は杜牧の「山行」を思わせるところから、これらの詩を読み議論を重ねた。

こうして議論が進められる中で、私は一つの提案を行った。「魯山山行」は有名な詩であるが、これまでに詳しい注釈はなく、「熊」「鹿」の対は優れたものとして名高いが、何故優れるのか十分論じられたこともない。分担を決めてこの詩に注を付け、またこの詩をどのように読むか、各人の見方を文章にしよう。それをまとめて紀要に発表しようというのである。学部生も院生も、参加者はみな自由に発言し、議論の中から詩に対する理解が深まっていくという授業は、そう何時でもできるものではない。この気運を形に残し、一人一人のためにも、研究室全体のためにも、将来につなげたいというのが私の願いであった。提案は幸い賛同を得て、各人の関心に応じて担当を決めた。この時点で、卒業論文の執筆を控えていた馬場は担当を外れ、熊に関する資料は学部三年安西明秀に引き継がれた。夏休み明けにレポートが揃い、後期の授業は全員で全員のレポートを批評し、引用されている作品や、関連する他の作品の読解を進め、意見を交換した。そしてこの過程を踏まえ、冬休みにもう一度各人が持論を検討し、書き直したものが、以下に掲載する文章である。学部三年荒木達雄は、当初生物学的に見た熊についての報告を行ったが、秋の授業の中でまた新たな問題に気付き、もう一つの文章を書き上げた。千葉貴はかねて梅堯臣の研究を志していたことから、歴代の詩話や最近の中国の研究より、梅堯臣に関する論評を探し出し、授業で報告してもらった。またこれとは別に紀

要掲載分として、梅堯臣の生涯とテキストについてまとめたもの、及び「魯山山行」全体について論じたものを執筆した。以下に論文を発表する十名は上記の他、学部三年宇都健夫・小山美樹・梶村永、学部研究生山崎藍、及び院生三名であるが、その専攻は、博士三年大山潔が元代の詩論、修士一年謝智芬が文言の小説、同白井澄世が近現代文学である。六朝詩を専攻する修士一年高芝麻子と、修士二年大村和人は、敢えて執筆陣に加えず、資料探しとその読解、論文のまとめ方の全般にわたって学部生の指導を担当してもらった。この他博士一年佐野誠子・修士一年田中智行・外国人研究生任秀彬・黄正謙・経済学部四年土井理恵子・法政大学文学部四年遠藤星希の諸君が、様々な形で授業に参加した。また研究室では、論文の草稿が批評を求めてしばしば閲覧に供された。これを読むことで、議論に加わった諸君も少なくない。以下の論文はこうした多くの学友の力を得て完成したものである。

梅堯臣の生涯と『梅堯臣集』の版本について

千葉　貴

一．梅堯臣の生涯について、その略歴

梅堯臣が生まれたのは北宋真宗の咸平五年（一〇〇二）である。仁宗の天聖五年（一〇二七）に結婚する。そのころ恩蔭により太廟斎郎に補され、以後は長く地方の県官を務める。三十歳頃から欧陽脩、尹洙らとの交流が始まる。「魯山山行」と関係があると考えられる欧陽脩の詩「遠山」は、陳新・杜維沫著『欧陽脩選集』（上海古籍出版社、一九八六年）によると、景祐元年（一〇三四）に作られた。銭維演、王曙から評価を受けるのもこの頃である。なお、官歴について、筧文生著『梅堯臣』（岩波書店、中国詩人選集二集三、一九六二年）と朱東潤著『梅堯臣傳』（中華書局、一九七九年）とは、明道二年（一〇三三）に彼が実際に徳興県令になったか否かについて見解を異にしている。